

維持管理は「地産地消」

北陸三県診断士会 とフォーラム 診断士の役割議論

日本コンクリート工学会中部支部は11月25日、「コンクリート診断士のこれからの役割を考えるフォーラムin福井」を開催した。「北陸三県のコンクリート診断士会による連携推進事業」の一環で、福井、石川、富山の各県の診断士会からなる「北陸三県コンクリート診断士会」が共催。診断士の今後の役割や構造物の維持管理のあり方として、地域に密着した視点が重要とする声が多く聞かれた。

冒頭、石川裕夏福井県診断士会会長があいさつに立ち、「8月に石川県で開催したフォーラムに続く連携推進事業で、今回は『コンクリート診断士の役割とそれを踏まえた維持管理のあり方』がメインテーマとなっている。福井ではすでに、診



断士会と自治体とが緊密に連携をとりながら、構造物の維持管理に取り組んでいる。こうした事例も切り口の一つにした」と述べた。

基調講演を行った鳥居和之金沢大学教授は「福井県におけるコンクリート構造物の維持管理の現状と課題」と題して、県内の橋梁における多数の劣化事例とこれまでに取られてきた対策などを詳細に解説し、その成果や問題点にも触れた。また、北陸地方でこれまで会場の質問に答えながら議論深める

構造物の維持管理に携わってきた第一線の研究者が、今後数年の間に相次いで引退することを指摘し、「維持管理には地元の人間があたるのが基本で、若い研究者やコンクリート診断士のみなさんに期待している。北陸の構造物は凍害、塩害、A SRの3重苦に曝されている。『ここでできれば全国どこでもできる』と、思っ自信をもって」と激励した。

講演では、構造物の管理者や建設コンサルが維持管理の取り組み事例などを発表した。診断士の役割に関する提案とし

の移行を目指したい」とした。

石川会長は、今後の診断士および診断士会の活動においては「地域性」と「ネットワーク」が重要になると指摘。「地域の材料特性や環境特性を熟知した地域の診断士が中核を担い、維持管理の『地産地消』を進めるべき」とした。その上で、「診断士会は多様な専門領域、異業種からなる技術者集団であり、ネットワークを構築することで幅広い知見を集積できる。また、診断士会を通して自治体や他団体とのネットワークも形成で

き、社会的信頼や発信力を高められる」として「ボランティアからビジネスへ」のビジョンを提示した。

パネル討論「これからの維持管理のあり方、コンクリート診断士のこれからの役割とは」では、竹内成和（福井県）、徳光卓（プレストレスト・コンクリート建設業協会）、小野定、奥田由法（北陸三県コンクリート診断士会）の4氏が登壇し、鳥居教授をコーディネーターに、会場からの質問への応答を中心に、今後の課題などを議論した。